

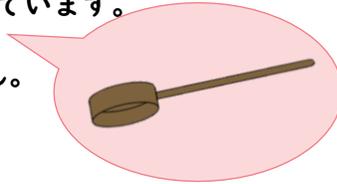


# 春の星座を探してみよう

Vol.2



春の星座探しの2回目です。今回は北の空に目を向けてみます。  
 北の空で同じくらいの明るさの7個の星が「柄杓(ひしゃく)」の形に並んでいます。  
 ひしゃくは神社やお寺などで水をくむときに使う道具です。  
 スプーンやフライパンのほうがイメージしやすい人もいるかもしれません。  
 「北斗七星(ほくとしちせい)」と呼ばれる星の並びです。  
 「斗」には「ひしゃく」という意味があります。

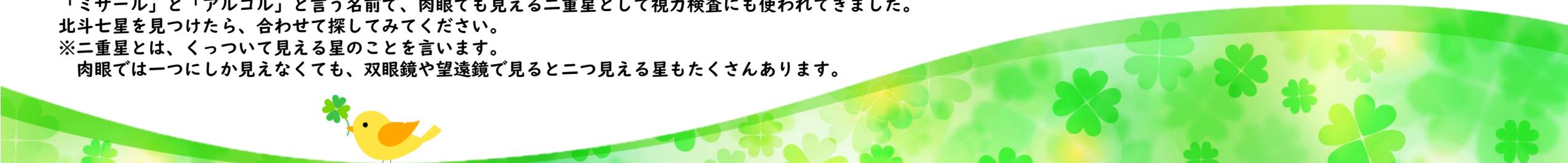


北斗七星は「おおぐま座」の背中からしっぽにあたる星の並びです。  
 おおぐま座は、88個ある星座のうち3番目に大きな星座。  
 星を線で結ぶと分かりやすい形をしているのですが、暗い星が多いので、  
 八王子で全部の星を結ぶのは難しいと思います。

北斗七星を使って「北極星」を探することができます。  
 北極星は一年中いつでも真北に輝く星です。  
 北極星を見つけることができれば、北の方角を知ることができます。  
 北斗七星の水をくむところの先の二つの星を結び、  
 その長さをおよそ5倍のばした先にあります。  
 八王子は北緯およそ36度。北極星の高さとその土地の緯度は同じになります。  
 明るさは二等星ですが、八王子でも見つけられますよ。

北極星は「こぐま座」のしっぽの星です。  
 おおぐま座とこぐま座の二つの星座は親子と言われています。  
 こぐま座は北斗七星を小さくしたような星の並びをしています。

また、北斗七星の持ち手から二つ目の星はよく見ると二つ見える「二重星」です。  
 「ミザール」と「アルコル」という名前で、肉眼でも見える二重星として視力検査にも使われてきました。  
 北斗七星を見つけたら、合わせて探してみてください。  
 ※二重星とは、くっついて見える星のことを言います。  
 肉眼では一つにしか見えなくても、双眼鏡や望遠鏡で見ると二つ見える星もたくさんあります。



# 春の星座を探してみよう

Vol.2

## おおぐま座とこぐま座

二匹のクマはギリシャ神話に登場する親子です。

カリストは月の女神アルテミスに仕える美しい妖精(ニンフ)でした。

カリストは大神ゼウスに気に入られて、アルカスという男の子を授(さず)かります。

しかし、そのことを妬(ねた)んだアルテミスはカリストを追放しました。

さらにはゼウスの妻ヘラもカリストに怒り、カリストをクマの姿に変えてしまいます。

クマの姿にショックを覚えたカリストは、森の奥深くへと逃げていきました。

それから時がたち、アルカスは一人前の狩人(かりうど)に成長しました。

ある時、アルカスは森の中で大きなクマと出会います。

クマはアルカスを見つけると、大きな声を上げて、アルカスめがけて走ってきました。

実は、アルカスが出会ったクマは母カリストでした。

カリストは喜びのあまり、クマの姿であることを忘れて近づこうとしたのです。

しかし、アルカスにわかるはずもなく、アルカスにはクマが襲(おそ)ってくるようにしか見えません。

アルカスがカリストめがけて矢を射(い)る直前、天から二人の様子を見ていたゼウスは、

アルカスをクマの姿を変え、そのまま二匹を天へと空へ放り上げ星座にしました。

この時、ゼウスが二匹のしっぽをつかんで放り上げたため、

おおぐま座とこぐま座のしっぽは、クマらしくない長いしっぽになったのだと言われています。

